

命題的内容について自然主義者であるとはどういうことか

オーガナイザー

藤川直也（東京大学）

提題者

浅利みなと（東京都立大学）

榎本啄杜（大阪大学）

伊藤謙佑（同志社大学）

道田蒼人（京都大学）

食料源の場所を仲間に教えるミツバチのダンス、捕食者からの逃避行動を指令するベルベットモンキーの警戒音など、情報伝達を目的とした活動は枚挙にいとまがない。動物シグナルが運ぶ情報と言語が伝える情報の間に本質的な差異はあるのだろうか。この問いに「無い」と答えることには誰もが躊躇するだろう。では問いを変えれば、両者の断絶は一体どこに存するのか。この断絶を生む要因は「命題的内容 (propositional content)」の有無であるという答えはありうるが、それはアドホックな応答に過ぎない。なぜなら、命題という概念そのものもまた本性を見通しづらいものだからである。たとえば、命題的内容を付与される実践には成功や失敗のような規範的評価を下すことができる。さらには、実際には成立していない事態を表象することも可能なので、意味論的なレベルで真偽を問いうるという性質を備えており、こうした特徴が命題的内容を自然的情報から区別する。また命題的内容は言語的文節化に対応する構造を持ち、それによって否定をはじめとした論理的操作が許容できるとされる。こうしたさまざまな性質が「命題性」のもとに理解されており、それらはたしかに人間の表象内容を特徴づけている。けれども、自然的情報にも間違い可能性があるとする立場もあり、さらには、動物のシグナルにも誤表象問題や嘘の位置付けに関する問題が認められ、それらをいかに説明するのかが論争的となっている。このワークショップでは、このように多様な角度から特徴づけられる「命題的内容」について、自然的情報や人間以外の動物の表象内容との関連性や非連続性を考察する。